

# 学 界 展 望

## ● 哲 学

### はじめに

「学界展望」哲学部門は福岡教育大学の鶴成久章がとりまとめ役を務め、各分野を牽引する気鋭の会員に分纂稿を依頼した。依頼に際して、執筆方針は前回までの担当者（関西大学・吾妻重二）の方針を基本的に踏襲し、2023年に日本国内で刊行された単行本を中心に、中国哲学・思想に関わりのある論著（訳書を含む）につき、論評よりも紹介に重点を置き、なるべく多くの情報を提示するようお願いした。

各分野の執筆者は、次のとおりである。

はじめに・総記： 鶴成久章（福岡教育大学）

古代（先秦～漢）： 工藤卓司（県立広島大学）

中世（三国～唐）： 古勝隆一（京都大学）

近世（宋・元）： 藤井倫明（九州大学）

近世（明・清）： 尾崎順一郎（立命館大学）

近代： 竹元規人（福岡教育大学）

道教・仏教・民間信仰： 齋藤智寛（東北大学）

日本・朝鮮漢学など： 高田宗平（中央大学）

分纂稿は鶴成がとりまとめたのち、本学会出版委員会での検討を経て全体を調整した。

### 一、総記

中国哲学・思想研究にも関連が深いシリーズとして「アジア人物史」全12巻が2022年12月～2024年2月に集英社から刊行された。全て書き下ろしであり大変興味深い人物通史である。

中国哲学関係の研究を多数掲載する総合的な論文集としては、国際日本文化研究センターの共同研究の発展的成果である吉村美香編『巫・占の異相 東アジアにおける巫・占術の多角的研究』（志学社）がある。人類普遍の営みである「巫術」「占術」について、殷墟卜辞といった古代中国の占術と巫術から、古代・中世の日本列島や琉球、朝鮮の占いや巫術、そして、現代の沖縄・横浜中華街の占いに至るまで、全11篇の論考を集めて学際的・多角的な検討を行っている。また、雫雪艶・黒田彰編『東アジアの「孝」の文化史 前近代の人びとを支えた価値観を読み解く』（アジア遊学288、勉誠社）は、前近代の東アジアの人々にとって最も重要な価値観、行動規範であった「孝」という思想と文化について、中国の文物や文献を対象とする論考をはじめ、仏教における孝文化、日本文学における孝文化等についての19の諸論考により、学際的な視点から考察を行っている。2021年に上海遠東出版社から出された『孝文化在東亜的伝承和発展』の日本語版であるが、収録する論文は相互に出入がある。

書に関わる研究書としては、亀澤孝幸『文と書 中国書字思想の探究』（勉誠社）がある。本書は、書を造形芸術として捉えるのではなく、「書字」という人間の普遍的な営みから書の意義を捉え直すことで、「文字を書くこと」に関する思想—書字思想の体系を明らかにしようとしたものであるという。また、邱振中著、河内利治監訳、浅野天童訳『書法の形態と解釈』（白帝社）は、『邱振中書法論集—書法の形態と闡釈（修訂版）』（中国人民大学出版社、2011）の翻訳で、成田健太郎氏による新刊紹介（『書学書道史研究』33、2023）がある。さらに、河内利治『書話拾遺—書を学ぶ83のエピソード』（東方書店）は、洪丕謨・沈培方『古代書法家軼事百則』（上海書画出版社、1984）の訳注に余話を加えたものである。

美術史研究の論文集としては、曾布川寛・宇佐美文理編『中国美術史の眺望—中国美術研究会論集』（汲古書院）があり、古代から明清に至るまでの中国美術を俯瞰する論考16篇を収録する。

文化史関係の論文集としては、高橋忠彦編『浙江の茶文化を学際的に探る』（東アジア海域叢書8、汲古書院）がある。書名の通り、浙江の茶文化の全体像を多様な視点から学際的に考察した8篇の論文に加えて高橋忠彦「茶経全訳注」を収録する。

永塚憲治編『養生思想2房中術『素女妙論』（京大人文研科学史資料叢書10、臨川書店）は、房中書『素女妙論』の訳注書。京大人文研共同研究班「人間は自然をどう理解したのか—中国科学史研究の最前線」の成果である。「刊行の辞」（武田時昌）に、日本の中国科学史研究は「かつては世界に誇る水準にあったが、危機的状況にある」「本訳注シリーズが日本における中国科学史研究を活性化し、学問的伝統の継承、発展の一助となることを期したい」というのは、中国科学史研究のみならず、中国哲学・思想研究も同様の状況に置かれていると言わざるを得ない。

個人の全集・著作集としては、『山田慶児著作集』（臨川書店）第4巻「中国医学思想1」が出た。『中国医学の起源』に加え、2本の論文が収録されている。また、『藪内清著作集』（臨川書店）は、第8巻「補遺／総索引」が出され完結した。

復刊・改訂版としては、大崎正次『中国の星座の歴史』（雄山閣）がある。1987年に同社から出された原書を普及版として復刊したものである。三浦國雄『風水講義』（法蔵館文庫）は、2005年に文春新書として刊行された原書に付篇3篇が加えられている。池上正治『龍の世界』（講談社学術文庫）は、2000年に新潮選書『龍の百科』に加筆し改題したものである。  
(鶴成久章)

## 二、古代（先秦～漢代）

先秦から漢代までを主に取り扱った哲学思想関連の研究書は、前年に比してそれ程多くなかった。小丸成洋・佐藤利行編著『孔子の教え』（白帝社）や和田倫明・山谷和子『孔子 その人と思』（清水書院）等が出版されているが、いずれも入門書に属す。そこで歴史学のもので、哲学思想分野に関連する専門書を最初にいくつか挙げることにする。

まずは、渡辺信一郎『中国古代国家論』（汲古書院）である。先秦期から唐代までの

中国の古代国家について、①帝国論、②国家形成論、③古典的国制論、④専制国家論、⑤国家的土地所有を主題として論じ、著者がかねてより提出してきた中国古代の中華帝國論と専制国家論という枠組をさらに深化・展開させている。

また、祭祀という観点から前漢・後漢の「皇帝」像に迫った著作として、目黒杏子『漢王朝の祭祀と儀礼の研究』（京都大学学術出版会）がある。氏は儒学説の受容による「皇帝」の質的变化を伴う両漢交替期の礼制改革を儒家的な国家祭祀や儀礼制度の出発点とする日本固有の視点を引き継ぎ、礼制改革の前提である前漢の皇帝祭祀を核とする儀礼の実像を明らかにし、それらの挙行によって見えてくる前漢特有の「皇帝」の性質や支配の正当性の所在を考察することで、公的／私的、正統／非正統といった二項対立的評価の克服を図ろうとしている。

次に、中国の古代文献には説話が満ち溢れているが、落合淳思『古代中国 説話と真相』（筑摩選書）はその説話を「歴史上の事実として伝えられたが、実際には事実ではないもの」と定義して、各説話の虚構性を暴いていく。過去の社会の総合研究としての歴史学という立場から、説話と事実とを明確に区別することで人文科学と社会科学の融合を図ろうと試みている。

秦の始皇帝が『韓非子』の孤憤篇と五蠹篇とを愛読していたことはよく知られている。鶴間和幸『始皇帝の愛読書 帝王を支えた書物の変遷』（山川出版社）は様々な資料を用いながら、そうした始皇帝の読書体験を追跡し、政治や生き方に書物上の知識を活用しようとする意識が強かったと指摘し、若い頃の帝王学の書から、外交と戦争の書、天下統一の書を経て、晩年の方術・医学・老荘の書へという読書傾向の変化を論じる。そして、そこに人間始皇帝の成長と変化の跡を読み取ろうとしている。

続いて藤田勝久『史記の再発見』（汲古書院）は、これまでの研究が『史記』の著作意図や司馬遷の歴史観に偏りがちで、司馬遷のメッセージを探ろうとする試みは少なかったという反省に基づき、出土史料や考古学の成果を踏まえた「資料学」を駆使して、司馬遷が生きた同時代のなかで、文学と歴史書の性格をもつ『史記』の本質を考えようとした論著である。司馬遷に「古代から同時代までの歴史の盛衰を人物の事績で論断するという思想」があり、それを後世に伝えようとしたのだと指摘している点は、哲学思想研究上でも参考にならう。

小林春樹『『漢書』の新研究——その董仲舒像を中心として——』（汲古書院）は序章と終章の他、二つの部分から成っている。第1部『『漢書』篇』では、『漢書』を漢王朝神聖化のための「頌漢」の書と見なしてきた先行研究に対して、後漢王朝の再受命を正当化するための「頌後漢」の書であったとする。その上で第2部「董仲舒篇」では、董仲舒を儒学の官学化を実現した大儒とは見ずに、著者独自の「三段階的災異説」を提唱した『春秋』災異学者として理解すべきものであり、その「三段階的災異説」こそは第1部で提示した『漢書』像を成立させるものだったと指摘している。

その他、古井龍介他著「アジア人物史」1は「神話世界と古代帝国」をテーマとして、歴史のはじまりから古代帝国の成立・発展に至る時代が扱われている。古代中国に関連する部分としては、「中国神話」（牧角悦子）、第6章「悠久の時を超える古代中国の思

想」(湯浅邦弘)、第7章「中国最初の皇帝の人間像」(鶴間和幸)、第8章「遊牧国家の君主はこうあらねばならぬ—冷酷にして寛大、先読みは鋭く」(林俊雄)、第9章「『史記』の通史と世界史の創造」(藤田勝久)、第10章「儒教王権の誕生」(渡邊義浩)、第11章「伝統から革新へ—後漢末の混乱と「乱世の奸雄」の登場」(牧角悦子)を含んでいる。

次に訳注について述べたい。まずは、土田健次郎訳注『論語』(ちくま学芸文庫)が刊行された。また、宮宅潔編『嶽麓書院所藏簡《秦律令(壹)》譯注』(汲古書院)は、京都大学人文科学研究所の研究班「秦代出土文字史料の研究」及び「秦漢法制史料の研究」の会読の成果である。主として陳松長編『嶽麓書院藏秦簡(肆)』(上海辭書出版社、2016)所載の秦律、第一組から第三組までの訳注篇とそれについての札記15本を含む考証篇から成る。その他、訳注の成果としては、渡邊義浩訳『後漢書』があり、2023年は『本紀[二]』及び『志[一]』(共に早稲田大学出版部)が上梓されている。

また、中国書の邦訳として、彭富春著、胡逸蝶訳『「大道」を語る』(白帝社)、陳致著、湯浅邦弘監訳、湯城吉信他訳『『詩経』の形成 儀礼化から世俗化へ』(東方書店)及び袁珂著、佐々木猛訳『中国神話史』(集広舎)が刊行された。一方、日本の業績についても、武内義雄著、陳敏訳『論語之研究』『老子原始』(共に長江出版伝媒・崇文書局)及び末永高康著、佐藤将之監訳『性善說的誕生：先秦儒家思想史的一个斷面』(国立台湾大学出版中心)が中国・台湾で出版されており、早くも様々な論考の中で引用されつつある。

最後に、前年に引き続き、貝塚茂樹『中国の神話 神々の誕生』(講談社学術文庫)、林巳奈夫『中国古玉器総説(新装版)』『中国古玉の研究(新装版)』(共に吉川弘文館)といった名著が再刊されたことも追記しておく。貝塚著の底本は1971年に出版されているが、その原本『神々の誕生』は1963年に筑摩書房から出版されたもの、また、林著の旧版は二冊共1991年に刊行されたものである。20世紀を代表する著書として、今でも色褪せない魅力に満ちた論著だと言えよう。(工藤卓司)

### 三、中世(三国～唐)

橋本秀美・葉純芳著『朱門禮書考—附鄭注禮記補疏(曲禮檀弓)』(中国古典研究叢書、すずさわ書店)は、『儀礼経伝通解』等、朱熹とその弟子たちの礼学著作を論じた論文集であるが、その付録とされている「鄭注禮記補疏(曲禮檀弓)」は、『礼記』鄭玄注に対するコメントであり、漢唐経学の理解に資するものである。

吉川忠夫『読書漫筆』(法藏館)は、著者の著した学術的な短文を集成したものであり、なかに、「『世説新語』雑記」、「『高僧伝』解説」、「『笑道論』訳注・解題」など、中世に関する重要な記述が見える。

この時期に成書した古籍の訳注として、東晋の常璩『華陽国志』に対し、中林史朗訳『完訳華陽国志』(志学社)が出た。訳のみならず、詳細な注もつけられている。また、「全譯三國志」シリーズの第二冊として、渡邊義浩・仙石知子編『魏書』(汲古書院)も出された。

仏教については、氣賀澤保規編著『論集隋唐仏教社会とその周辺』（明治大学東アジア石刻文物研究所・汲古書院）や、古勝亮『中国初期禅思想の形成』（法藏館）が出版され、また中国の研究書の訳として、方立天著、柳幹康ほか訳『中国仏教哲学要義』（大蔵出版）、頼永海著、何燕生訳『中国仏性論』（法藏館）などが出た。

歴史学の著作のうち、中国中世思想に関わるものを若干挙げる。佐川英治編『多元的中華世界の形成—東アジアの「古代末期」』（臨川書店）は、東アジアの三～八世紀を、多元的性格を持つ中華世界が東アジアの規模で拓かれていく時代としてとらえ、広く周辺世界とのかかわりから歴史の展開を探るものである。収められた論文に、戸川貴行「南齊・梁における『周礼』の受容について」、付晨晨「齊梁類書における魏晋知識の典故化」、小尾孝夫「梁代における建康の繁栄と仏教および寺院空間」、魏斌「北朝晩期の寺院と政治文化—“国”寺、行政区と戦場」などがある。

三国志学会編『大上正美先生傘寿記念三国志論集』（三国志学会）には、三国時代の思想・文学を論じた論文も収められている。

平田陽一郎『隋—「流星王朝」の光芒』（中公新書）は、隋の文帝と仏教との関わりなどを論じており、思想史の参考となろう。

「アジア人物史」3『世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア』には、苻堅、昭明太子、陶淵明、隋の文帝、隋煬帝の蕭皇后など、歴史的人物が取り上げられ、最新の研究を反映したものとなっており、思想史研究者としても目を通す価値があろう。

復刊されたものとして、礪波護著『文物に現れた北朝隋唐の仏教』（法藏館）が挙げられる。「文物に現れた北朝隋唐の仏教」などの論文が収録されている。

美術史に関しては、曾布川寛・宇佐美文理編『中国美術史の眺望—中国美術研究会論集』（汲古書院）が出た。中世に関するものとして、以下の論文が収められており、思想史研究にも有用である。林聖智「南京西善橋墓「竹林七賢と榮啓期図」の構成とその意味—人物品評の視点より」、肥田路美「道宣撰『集神州三宝感通録』靈像垂降録の仏像観—僧祐撰「雜像図」と比較して」、河野道房「山西省朔州水泉梁出土北齊墓壁画について—奥行き表現の萌芽」、下野健児「褚遂良「雁塔聖教序」の書風（刻風）について—「書くための楷書」、西林孝浩「韓休墓考—墓室西壁壁画と墓室靈座の検討」、古田真一「宝山二号遼墓石室壁画に関する試論—楊貴妃画のバリエーションとその受容について」、山中理「表現の質と作者の深意を求めて」、宇佐美文理「風景描写の意味—杜甫詩の風景表現」。

考古学に関する展覧会図録として、馬淵一輝編『魏晋南北朝の金属器』（黒川古文化研究所）が出た。この図録は、魏晋南北朝時代の青銅器、響銅（サハリ）と金製品を含む、網羅的なものであり、しかも学術的考察がなされており、有用である。特に岡村秀典「仏教文化の東伝と中国青銅器の変容」は、礼制研究・思想史研究にも有用であろう。

建築史に関わるものとして、「田中淡著作集」の第二巻として、田中淡著『中国建築と庭園』（中央公論美術出版）が出た。思想研究にも参考となる、「中国建築からみた寝殿造の源流」、「中国建築・庭園と鳳凰堂」、「中国造園史における初期的風格と江南庭園遺構」などが収録される。  
(古勝隆一)

#### 四、近世（宋・元）

宋代史研究会研究報告の第12集として『宋元明士大夫と文化変容』（汲古書院）が刊行され、その中に哲学・思想分野に関わる論考が5篇、収録されている。掲載順に紹介すると、谷口綾「儒医再考—上医としての儒医」、田中有紀「士大夫の音楽論における北宋の経験：鐘の铸造と『宣和博古図』の古器蒐集」、津坂貢政「朱熹の伝記題跋をめぐって」、福谷彬「陸九淵の皇帝説得術—「刪定官輪対劄子」とその周辺—」、中嶋諒「南宋浙東陸学の衰滅—黄震の陸九淵評価をめぐって」である。谷口論文では、「上医」という言葉を手がかりに、北宋期に出現した「儒医」という存在の制度的、社会的認識の変遷が論じられている。本稿を通して、従来、「術」や「芸」として低く評価されていた「医」が、北宋以降、儒学的理念を背景とする「上医」意識と結びつくことで「学」として評価されるに至る経緯が理解できる。田中論文では、北宋時代になされた楽器（鐘）をめぐる楽論や蒐集、铸造が、「その後の士大夫の楽論」にどのような影響を与え、またどのような意味を持ったのかという問題が、徽宗の『宣和博古図』、馬端臨の『文献通考』、朱載堉の『律呂精義』、江永の『律呂新義』、『周礼疑義挙要』などの資料を駆使して考察されている。本稿は、芸術研究、制度研究としても評価でき、儒学研究の裾野の広さを再確認させてくれる。津坂論文は、朱熹が書き残している「伝記題跋」に注目し、その数量、執筆の背景や経緯を調査し、朱熹が「伝記題跋」を自己の思想を伝達するための媒体として「戦略的に利用」していた事実を明らかにしている。本稿は、これまで思想研究の分野ではほとんど利用されることのなかった「題跋」の「資料的潜在可能性」に注目し、その開拓を試みたものとも言える。福谷論文は、陸九淵が孝宗に輪対を行った際の上奏文「刪定官輪対劄子」を取り上げ、皇帝（他者）に対する「説得術」という視点からその内容に分析を加え、陸九淵の説得方法に朱熹の場合とは異なる「心学」的な特徴が見られることを明らかにしている。本稿によれば、「理学」と「心学」の思想的立場の相違は、皇帝（他者）への献言＝説得の仕方にも反映していることとなる。中嶋論文では、黄震の『黄氏日抄』に見られる陸九淵評価を考察し、「朱陸折衷」的な論調で継承されてきた浙東地域における陸学が、黄震によって「封殺」され、陸九淵が朱熹の対立者として批判の対象となっていく経緯が明らかにされている。本稿によれば、心学の土壌でもあった浙東地域で「史学、文献学」が盛行した原因は、黄震による陸学の「封殺」、朱子学への転換にあると見なすことが可能となる。以上『宋元明士大夫と文化変容』に所収の哲学・思想領域の論文を俯瞰して気付くのは、医学、楽器、題跋、輪対などに注目し、従来の思想研究とは異なるアプローチが見られること、使用するテキストも歴史書や上奏文、図録など非常に多様化しているという点である。これは哲学・思想が歴史学や文学など他分野ともリンクする形で研究が進められるようになってきていることで、好ましい傾向であろう。

橋本秀美・葉純芳『朱門禮書考—附鄭注禮記補疏（曲禮檀弓）』（すずさわ書店）は、中国語による著作であるが、『儀礼経伝通解』を軸として、朱熹、黄榦、楊復など朱門が展開した礼学研究について考察を加えている。朱子学研究というと「思想」分析が中

心になりがちだが、本書は「礼学・文献学・経学史」の脈絡から朱子学を取り上げており、貴重である。

塘耕次『中井履軒『周易逢原』と朱子『周易本義』』（汲古書院）は、中井履軒が『周易逢原』で展開している朱子の『周易』解釈に対する批判を取り上げ、検証している。本書では、履軒が朱子の説をどのように批判し、自説を展開しているか、六十四卦すべてにわたり詳しく紹介されている。本書は、中井履軒や懐徳堂研究の一環とも位置付けることができるが、朱子『周易本義』の内容にも触れており、履軒の批判を通して朱子の『周易』解釈の特徴がより鮮明に浮かび上がるようになっており、朱熹思想研究としても評価できる。

なお「アジア人物史」4『文化の爛熟と武人の台頭』第9章「近世東アジア思想界の巨人—朱子学の大成者」（小島毅執筆）に朱熹、王安石、蘇軾、程頤、陸九淵、真徳秀といった宋代の思想家が取り上げられている。

朱子学関連の訳注には、今倉章『全訳全注『孟子』朱子注』第4巻（希望）や、日本漢詩文學會編『朱子絶句全訳注』第6冊（汲古書院）などがある。（藤井倫明）

## 五、近世（明・清）

2023年の明清思想研究では、二つの分野で複数の著書が出版された。

一つ目はヨーロッパとの学術交渉に関する研究である。

齊藤正高『方以智の物理探索—十七世紀中国の自然学とイエズス会の学術』（知泉書館）は、物理学・天文学・地理学・生理学・解剖学などの諸分野にわたり、かつ難解な用語を多く含むイエズス会士たちの漢文著作を読み解きながら、方以智の学問がヨーロッパの学術を批判的に受け入れて形成されたものであることを論じる。

黄イエレム『宣教師と中国をめぐる「知」の構築—アヘン戦争以前のプロテスタント』（東京大学出版会）は、広範で多様な史料と研究を縦横に活用し、イギリスがインド亜大陸や東南アジアから中国へと勢力を拡張し始めた19世紀初頭において、プロテスタントの宣教師が中国への理解を深めるために取り組んだいくつかの活動を取り上げ、その経緯と歴史的背景について考察する。

二つ目は陽明学に関する研究である。

小路口聡『王龍溪の良知心学—「生機」論という視座』（研文出版）は、「生機」を王龍溪の良知心学に通底する重要概念として位置づけた上で、その思想的意義を考察する。本書では陸象山・王陽明・王龍溪の思想的系譜から説き起こし、「生」をめぐる存在論、良知と知識の相違に関する学問論、「真機神應」や「一念獨知」などと称される良知の特色を取り上げ、様々な角度から「生機」論を検討する。「致良知」「無善無悪」「生機」をはじめとする個々の概念を詳細に検討しつつ、王龍溪の文章に込めた意図を読み解いていく。なお、筆者は共同研究として『龍溪會語』の訳注作業にも取り組み、既に全訳が完成しているという。こちらも早期の出版が待ち望まれる。

鶴成久章『明代儒教思想の研究—陽明学・科挙・書院』（研文出版）は、「明代の科挙制度と陽明学」と「明代の書院制度と陽明学」という二部構成のもと、国内外の貴重資

料をも涉猟しつつ、陽明学の展開を科挙や書院と関連づけて考察する。第一部では明代科挙制度に関する概要、四書・五経の学ばれ方、明代における八股文、陽明学批判や王守仁の孔廟従祀に関する出題、受験者・出題者の科挙への向き合いなどを取り上げる。第二部では書院を陽明学発展の舞台として位置づけ、陽明学の成立・伝播・継承そして衰退に至るまでの展開を多角的に論じるとともに、東林書院を拠点に活動した顧憲成・高攀龍らの思想分析を行う。なお、本書には三浦秀一氏による「書評」（『集刊東洋学』131）が発表されている。

共著として、「アジア人物史」6『ポスト・モンゴル時代の陸と海』が出版された。明清思想に関連する論考としては、小島毅「東アジアの中の陽明学一人間への信頼と強い正義感」が収録されている。また、研究史の整理として、呉震著、早坂俊廣訳「陽明後学の研究—回顧と展望」（『信州大学人文科学論集』11）が発表されたので、あわせて紹介しておきたい。

この他、歴史分野にも関連する研究として、滝野邦雄『明・景泰帝諡号研究』（白桃書房）が出版された。本書は土木堡で英宗が瓦剌（オイラート）の捕虜となった後、皇太子を差し置いて帝位に就いた景泰帝に対して、諡号を贈るまでの背景とそこに込められた意図を歴史的・思想的な観点から分析を試みる。

最後に訳注に関する成果を取り上げる。

野間文史氏は『尚書』と『毛詩』に関する清儒の学説の訓注を上梓した。まず、『清朝初期の尚書研究—顧炎武『日知録』と閻若璩『尚書古文疏證』』（明德出版社）は『日知録』巻2尚書篇と『尚書古文疏証』巻1・2・4（巻3は全闕）を収録する。次に、『清朝の毛詩研究—馬瑞辰『毛詩傳箋通釋』と胡承珙・陳奂・王引之』（同上）は『毛詩伝箋通釈』の「自序」「例言」と巻1から巻3、胡承珙『毛詩後箋』の「序」（馬瑞辰・陳奂）と「胡君別伝」（胡培翬）、陳奂『詩毛氏伝疏』の「自序」「条例十凡」、そして王引之『経義述聞』巻31「通説上」と巻32「通説下」のそれぞれ一部を収録する。なお、明清分野には該当しないが、『三禮注疏訓讀（抄）』（同上）も出版されている。

方志遠著、浅野裕一監修、三浦吉明訳『王陽明伝』（科学出版社東京）は一般読者向けに書かれた『千古一人王陽明』（江西人民出版社、2017）の日本語訳である。浅野・三浦両氏による翻訳としては第4弾の作品であり、中国古典学の裾野を広げる取り組みと言える。（尾崎順一郎）

## 六、近代

黄進興著、工藤卓司訳、石井剛解説『義理学から倫理学へ—清末民初の道德意識の転化』（台湾漢学研究叢書、東方書店）は、『從理學到倫理學：清末民初道德意識的轉化』（允晨文化實業、2013）の上篇を翻訳したものである。宋明理学家の道德観を概観した後、太平天国の挑戦と曾国藩による義理学の再興、そして梁啓超以後の倫理の近代性の追求へと論を進めていく。この過程で、善行を「無意識の造作」とする倫理観から、道德を「有意識の善志向」とする倫理観への転換が起こった、とする。そこで、梁啓超以後の「権利説」が、現代西洋倫理の善・義務より権利を優先する道德的思惟へと変化する

るのか否かについては、成り行きを見守りたい、とする。

王中江著、馬場公彦監修・訳、葛奇蹊・佐藤由隆訳『自然と人 近代中国における二つの思想の系譜の探究』（三元社）は、著者による『自然と人—近代中国兩個觀念的譜系探微』（国家哲学社会科学成果文庫、商務印書館、2018）の翻訳である。近代中国における新たな哲学用語や概念の翻訳と、古代中国の哲学・用語の再解釈・再編成、という問題に焦点を当て、近代中国における自然と人の概念の誕生・構築から始まり、嚴復・章炳麟・胡適・馮友蘭・金岳霖・陳独秀・張申府・張岱年・辜鴻銘・殷海光・梁漱溟・馬一浮らの思想を、超自然・実在・物質・文明・生命という5つの概念と関連付けて論じた、概念史の大著である。

銭国紅『近現代中国の儒教』（大妻ブックレット8、日本経済評論社）は、近現代から現在までの儒教に対する評価と批判、また伝統と価値観、現代文化との関係といった諸トピックを概観する。著者によれば、「一人の現代中国人の儒教への再発見の記録書」（あとがき、89頁）でもある。

日本孫文研究会・神戸華僑華人研究会編『東アジア世界と共和の創生 辛亥革命110周年記念国際学術シンポジウム論文集』（孫中山記念会研究叢書8、汲古書院）は、深町英夫「直線かメビウスの輪か—孫文の共和思想と近代中国の体制転換」を巻頭に、宋教仁暗殺事件についての尚小明・緒形康・廖大偉三氏の論考、鄒小站「清末民初の思想界における「暴民政治」をめぐる論争」、莊沢晞「辛亥革命における民権の理想と実践の行方」、徐兆安「1920年代の社会科学と継続革命論—陶希聖『中国社会之史的分析』を中心に」など11章から成る。

小野寺史郎『近代中国の国家主義と軍国主義』（晃洋書房）は、梁啓超に中国の「民族主義」と「国家主義」の起源を探り、第一次世界大戦前後の中国におけるミリタリズムと科学・デモクラシーとの関係、群集心理、平和論、といったテーマについて、「ある概念が中国に導入されたのち、それが元々の意味や当の紹介者の意図を離れて、他の論者によって、あるいは当時の言論界の文脈の中で、異なる含意を与えられ、読み替えられ、横領（appropriate）されていった過程」に焦点を当てるという意味での概念史の視角から、そうした「同時代の文脈やフレームの分析」（あとがき、174頁）に重きを置いて論じている。

中村元哉編著『改革開放萌芽期の中国 ソ連観と東欧観から読み解く』（晃洋書房）は、1980年代の中国が、ソ連・東欧諸国をどのように観察し、それを改革開放政策に生かそうとしたのかを、中国研究者とヨーロッパ研究者の共同研究により分析する。近代以来の、中国における政治・社会体制変革の構想と実践については、これまでも多数の研究があるが、本書によってそうした問題関心が1980年代までつながってきた、と言える。

「アジア人物史」11、重松伸司巻頭言『世界戦争の惨禍を越えて』は、第5章「中国統一から戦後台湾へ」（土田哲夫）で蒋介石、第6章「自由主義の開拓者、胡適と陳寅恪の生涯」（緒形康）で胡と陳、第7章「毀誉相半ばする革命のカリスマ」（石川禎浩）で毛沢東をそれぞれ「主人公」とし、関連する多数の人物の略伝を収録する。字数の制

約で取り上げられた人物を列挙することはできないが、人選と配列に特色がある。

陶徳民・吾妻重二・永田知之編『中国学の近代的展開と日中交渉』（アジア遊学 292、勉誠社）は、「第1部 近代における章学誠研究熱の形成とそのインパクト」（論文6本、コラム4本）で、19世紀中国知識人・内藤湖南・胡適・余嘉錫・梁啓超・劉咸焯・何炳松らの章学誠理解を論じ、「第2部 経史研究の新しい展開と日中人物往来」（論文7本、コラム4本）で那珂通世・桑原隲蔵・羅振玉・王国維・林泰輔・松崎鶴雄・皮錫瑞・諸橋轍次・武内義雄・吉田鋭雄・西村天囚・水野梅暁・『古史辨』派・宮崎市定・中江丑吉らの学術と交流を取り上げ、「第3部 民間文学と現代中国への眼差し」（論文4本、コラム3本）では狩野直喜・青木正児・増田渉・辛島驍・竹内好・吉川幸次郎らの、小説・文学研究や敦煌学を扱う。視野の広い、類書のない論集である。（竹元規人）

## 七、道教・仏教・民間信仰

ここでは、仏教・道教・民間信仰を中心とした中国宗教研究について記す。「宗教」の範囲はやや広めに考え、葬送儀礼は含めるが占術・風水は含まないというあたりで線を引いた。紹介文の繁簡は筆者の能力による偏りであって他意はない。

死生観・葬送儀礼について、稲田奈津子・王海燕・榊佳子『黄泉の国との契約書—東アジアの買地券』（勉誠社）は、時代は後漢から南宋、地域は中国・朝鮮・日本にわたる17通の買地券について、石刻や拓本のカラー写真に釈文、現代語訳、解説を附して収録する。本書には、中国語版『古代東亜世界的買地券』（浙江人民出版社、2024）もある。町田隆吉『出土文献からみた魏晋・五胡十六国時代の河西』（桜美林大学叢書、論創社）も、その半ばは冥婚書や鎮墓文など来世観や葬送文化にかかわる考察に充てられている。前二著と同じ問題を思想史や宗教学などの角度から論じた論集が田中文雄編『冥府考 死者の世界』（ノンブル社）であり、中国学関係では、田中文雄、菊地章太、土屋昌明、浅野春二諸氏の論考が収められる。

仏教について。船山徹『増補改訂 東アジア仏教の生活規則 梵網経 最古の形と発展の歴史』（臨川書店）は、2017年刊行同題書の『梵網経』校訂に修訂を加え、論考「覚盛願経『梵網経』下巻初探」を増補した新版である。同じ著者の『梵網経の教え 今こそ活かす梵網戒』（臨川書店）は、『梵網経』下巻の著者校訂本にもとづく現代語訳を含んだ一般書であり、後半はいくつかの戒についてその具体的内容や理念の原型を考察する論考が含まれる。考証の厳密さに圧倒されるが、しかし『楞嚴経』など後発の説を「後付け」「偽」と表現することには、思想史研究の視点からは違和感もあった。加藤朝胤監修、宮田亮平・船山徹・石垣明貴紀著『唯識 これだけは知りたい』（法藏館）も一般書であり、唯識思想が歴史的発展に沿って解説された後、「基本用語」というかたちで総説される。唯識の法脈は「既にインドや中国では途絶えたと言っても過言ではありません」（180頁）との一文に触れ、出家教団における師資相承ということでは正しい記述なのだろうと理解しつつ、在家仏教をも巻き込んだの復興運動が起こるのが中国唯識思想史の特徴であることに、改めて気づかされた。

頼永海著、何燕生訳『中国仏性論』（法藏館）は、1988年刊行の名著の翻訳。同主題

の日本語による成果に常盤大定『仏性の研究』（明治書院、1944）があるが、常盤が日本の最澄・徳一論争との連続を意識してか靈潤と神泰の論争を詳しく追うのに対し、頼著は禅宗の無情仏性説や頓悟と見性の問題に一章を設けるなど中国思想史研究として穏当な内容になっている。が、「アジア人物史」3『ユーラシア東西ふたつの帝国』第2章・倉本尚徳「玄奘、その理想と現実」は、近年の研究動向を反映して再び玄奘、道宣没後の長安仏教界に注意を向ける。

禅について、椎名宏雄『宋元版禅籍の文献史的研究』第1巻（臨川書店）が刊行された。禅籍の版本研究をほぼ単独で牽引し続ける著者の著作集で、特に『景德伝灯録』などの基本典籍について、著者若年の癖のない文体による諸論考がまとまって読めるのは貴重である。衣川賢次『臨濟録訳注』（大法輪閣）は、同著者の『新国訳一切経 臨濟録』（大蔵出版）には未収録の原文と現代語訳が収録され、解説は晩唐禅宗全般の状況から『臨濟録』の版本問題に及ぶ。西山美香・王珂・宋力『大唐名藍記・和漢禅利次第〔中国部〕』（禅研究会）は、日本各地に所蔵される『大唐名藍』『禅利次第』などの文献から五山十刹に関する記述を抜萃翻刻した資料集であり、用語解説と図版を附録する。

歴史学の角度からの仏教研究として、氣賀澤保規編『論集 隋唐仏教社会とその周辺』（汲古書院）は、隋唐をその前後とは異なり仏教を受け入れ仏教に規定された「仏教社会」と捉える論集。史学分野では王宮施設・都城史などの空間や儀礼に着目した仏教研究が隆盛しているように見受けられ、堀裕・三上喜孝・吉田敏編『東アジアの王宮・王都と仏教』（勉誠社）が刊行されている。

古勝亮『中国初期禅思想の形成』（法蔵館）、方立天著、菅野博史・張文良監訳『中国仏教哲学要義』（大蔵出版）は、筆者が前者では解題、後者では翻訳の一部を担当しているのでここでは書名のみを紹介する。

道教については、「アジア人物史」5『モンゴル帝国のユーラシア統一』第5章・横手裕「道教の変貌と社会への浸透—金元時代の全真教とその周辺」が、人物項目の形式を採りつつ当該時代の道教通史ともなっている。

その他の東アジア宗教について、邊英浩監訳、金鳳珍訳『全訳 天道教開祖水雲・崔濟愚「東経大全」「龍潭遺詞」』（明石書店）は、東学の聖典二種につき、漢文およびハングルによる原文とその日本語訳を収録する。大谷亨『中国の死神』（青弓社）は、白黒一対の神である無常の成り立ちと性格を、フィールドワークと文献研究を組み合わせで解明する。鄭伝寅著、朱虹訳『古典戯曲と東方文化』（東方書店）、田仲一成『東アジア祭祀芸能比較論』（知泉書館）は、共に道・仏二教と民間信仰を視座に据えた演劇・芸能研究である。

ほか、山本直輝『スーフィズムとは何か イスラーム神秘主義の修行道』（集英社新書）は、劉智、馬聯元ら中国ムスリムの著作や回族武術にも触れつつスーフィズムを概説する。

なお論文目録として、恒例の横手裕・孔詩・脇山豪「道教関係著書論文目録〔2022（令和4年）〕」（『東方宗教』142）、「禅学関係雑誌論文目録（2017、2018年）」（『禅学研究』101）のほか、佐藤厚「韓国道教文化学会『道教文化研究』論文目録訳稿」（『洞天

福地研究』11)がある。

宗教に関しては、単著より論文集が多く、地域を跨いだ研究、宗教学など中国学以外の視点を取り入れた研究が目につく。こうした傾向は研究対象の特性から理解は出来るものの、しかし本学会員としては、古勝亮『中国初期禅思想の形成』が中国古典学の方法で禅を研究し、中国思想史に初期禅思想を位置づけることを目指した、その志をも受け継ぐべきであろう。(齋藤智寛)

## 八、日本・朝鮮など

当該分野は、中国学からの著作は多いとは言えないが、日本文学、日本史、日本思想史、国語学(日本語学)からの著作を含めると、豊富なものとなる。当該分野は、近接分野の成果に学ぶところが多い分野と言えよう。

東野治之『史料学散策』(雄山閣)は、『史料学探訪』(岩波書店、2015)、『史料学遍歴』(雄山閣、2017)に続く、著者の「史料学」論文集の第3冊目である。日本古代史の立場からの論考ではあるが、墓誌と書体・墓券の関係、杏雨書屋所蔵トルファン出土の『列子』張湛注と『遺教経』有注本など、広義の日本古代における中国文化・漢籍受容に資する内容が多く含まれている。

佐藤道生『日本人の読書—古代・中世の学問を探る』(勉誠社)は、題名が示す通り、古代・中世日本人の読書(=学問)という課題を明らかにするため、厳密な書誌学的原本調査を駆使し、学問営為である「伝授」と読書の結果として日本人の漢詩文に注目した古代・中世日本漢学の総合的内容であり、当該分野の必読書籍である。特に、第一章「古代・中世 日本人の読書」は、読書における伝授の重要性、ヲコト点から仮名点への移行、抄物の登場、伝統的な読書法の終焉と古活字版・和刻本漢籍の出現の如き読書の変遷、更には正体漢文と変体漢文にも説き及び、古代・中世漢学の変遷を知る上で極めて有益である。

山本佐和子『抄物の言語と資料—中世室町期の形容詞派生と文法変化—』(くろしお出版)は、国語学の立場から、抄物に関して語彙・文法・書誌を基軸に精緻に分析し、国語史上に位置付ける内容であるが、抄物そのものの研究の論考も含まれている。該書は抄物を研究する上で裨益すること大である。

日本思想史の立場から、前田勉『江戸思想史の再構築』(思文閣出版)は、従来の各分野からの個別研究では江戸思想史の全体像は拡散され、捉え難いことを指摘し、新しいその全体像を描き出し、再構築を図っている。個別研究と俯瞰的な視座は両輪であり、該書のような視点は重要であろう。

向静静『医学と儒学—近世東アジアの医の交流』(人文書院)は、近世日本において「復古」を掲げた古方派医学について、古方派医家と儒者の人的ネットワーク、古方派医家が取り組んだ疾病をめぐる社会的背景、東アジアの医学・学術的思潮との関係を軸に、古方派医家である後藤良山・香川修庵・山脇東洋・吉益東洞は「『傷寒論』への復古」に局限できるような単線的なものではないこと、古方派医学は後世派医学のアンチテーゼとして興ったものではないことなど、中国医学が近世日本において、どのように

受容・変容・展開されたかを古方派中心に論じている。医学及び儒学に止まらず、国学・和学にも目配りし、広範に文献史料を博搜しており、近世の医学・漢学・考証学などの研究に大いに裨益するものである。

日本思想史の立場から、石運『十七・十八世紀の日本儒学と明清考証学』（ペリカン社）は、明清考証学との共時的な展開という視点から近世日本儒学思想の形成過程及びその特質を論じている。17世紀では林家、18世紀では古義堂及び護園の各儒者を対象に、まず明清考証学者の著述及び学説が近世日本において受容される過程の考察を通じて、近世日本儒学と明清考証学のパラレルな展開を跡付け、次に古学をめぐる一連の論争を手がかりに、古学の登場から反／非古学の思潮の展開に至る日本儒学思想史の文脈を再検討している。該書は、考察対象の学説を比較し、その共通性を見出すことに重点を置く従来の研究に対し、個々の思想文脈や東アジア思想史全体の文脈における位置付けの重要性を説く。近世儒学のみならず、近世思想史を研究する上で必読の書籍と言えるだろう。

吾妻重二編『家礼文献集成 日本篇』11（関西大学出版部）は、蟹養斎の『居家大事記』『土庶喪祭考』『儒法棺槨式』『火葬辨』の影印・翻印を取める。蟹養斎は、三宅尚斎に学んだ江戸時代中期の崎門派の儒者であり、尾張藩儒となった。本書は、蟹養斎の『家礼』や儒教儀礼、更には崎門派のそれらを研究する上で重要な資料となろう。

藍澤南城は江戸時代後期の儒者で、越後最大の私塾三余堂を経営したが、近世儒学史などの研究史には殆ど記載されていない。このような研究状況において、村山敬三『藍澤南城の学問と教育』（汲古書院）は、南城の学問と教育の全体を対象とした総合的な内容であり、貴重である。

許永晝『寛政の聖蹟図一『孔子行状図解』と文人藝術の創生一』（文人画研究会・汲古書院）は、寛政年間以後の文人が認識していた儒学や孔子像はどのようなものであったかを大命題とし、皆川淇園の画幅などを検討し、『孔子行状図解』図記及び『歴代帝王賛詠』などの訳注を施し、名古屋市蓬左文庫蔵『孔子聖蹟之図』（嶋津家久慶長13年跋）挿図の影印及び画題、聖蹟図諸本所収画題異同対照表を附記する。

二階堂善弘編『東アジアの思想・芸術と文化交渉』（遊文舎）は、日本漢学分野に限っても、馬鬣封（儒式墓）、藤澤南岳の『新楽府』、関西大学総合図書館内藤文庫所蔵資料を利用した富岡謙蔵、近世近代の大坂と京の画家の交流、徳川吉宗の中国嗜好と李衛（浙江総督）が監視した清人商人のそれぞれに関する各論考が取められており、江戸時代中期から大正期の「思想・芸術」に止まらず、文献資料のみならずフィールドワークをも駆使した広範なテーマを扱った内容と言える。

二松學舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究センター編『近代日本の学術と陽明学』（『陽明学』別冊、長久出版社）は、幕末期から昭和期に至るまでの陽明学の有り様、二松學舎大学（二松學舎期も含む）及び九州大学（九州帝国大学期も含む）の陽明学の研究や関わりなど、多岐に亘る多角的な内容である。

陶徳民編『国際シンポジウム論文集 内藤湖南研究の最前線』（関西大学出版部）は関西大学総合図書館内藤文庫所蔵資料を十全に活かした内藤湖南についての総合的研究

である。

石濱純太郎著・高田時雄編『石濱純太郎 大壺讀書記』（臨川書店）は石濱純太郎著・高田時雄編『石濱純太郎 續・東洋學の話』（臨川書店、2018）の続編と言えるもので、石濱の読書記の遺文を中心に収載したものである。

玄幸子編『国際シンポジウム論文集 内藤湖南と石濱純太郎 近代東洋学の射程—内藤・石濱両文庫収蔵資料を中心に』（関西大学出版部）は、関西大学総合図書館内藤文庫及び大阪大学附属図書館石濱文庫の収蔵資料を中心に、近代東洋学の足跡を辿る内容である。

町泉寿郎編『日本統治下の台湾・朝鮮と漢文教育』（戎光祥出版）は、戦前期の日本・台湾・朝鮮の各漢文教育とその教科書について論じたもので、近代日本漢学のみならず、朝鮮・台湾のそれにも関わる内容である。

この他、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『図説 書誌学—古典籍を学ぶ』（勉誠出版、2010）の訂正新版が勉誠社から刊行された。2010年版の誤りや不統一などを訂正し、カバー装も変更している。豊富なカラー図版と丁寧な解説を掲げ、中国古典文献学、和漢の書誌学を学ぶ上で道しるべとなるだろう。 (高田宗平)